

戒 律 と 倫 理

——三面記事を事例に——

小 山 典 勇

(大 正 大 学)

は じ め に

戒律、倫理に含まれる用語は、礼儀、慣例、慣習、先例、しきたり、道徳、マナー、エチケット、モラル、長幼の序、孝行、忠義、仁義、義理、慎み、自戒、自粛、自助努力、自浄作用、自己規制、自立など多様である。

これだけ人間関係や社会生活を円滑にする約束事がありながら、新聞の三面記事は多種多様な犯罪、出来事で賑やかである。約束事が守られない証左であり、三面記事は現代社会の諸問題の縮図と言えるだろう。⁽¹⁾⁽²⁾

三面記事を資料に 1. 社会の一員としての企業・業界、2. 家庭における家族や地域社会の一員にどのような問題が起り、どのような対応がなされているのか、違法ではないが「同義的に」、「人道上」、「倫理として」問題があるという案件について考察すれば、そこに働く自浄作用、自己規制が大会テーマである戒律、倫理に該当すると思われる。

三面記事を事例に世論調査を参照して分析考察を進め、問題の本質が見えてきたところで仏教の出番があれば、何が考えられるか、仏教はどのように考えるか、検討することにした。

なお記述は約束事、自浄作用、自己規制を戒律、倫理に該当する用語として使用する。

キーワード：仏教的生き方，家族，地域社会，自助努力，自浄作用，自己規制，戒律，倫理，環境問題，人権問題

1. 社会の一員としての企業・業界，問題，その対応

①スポーツ界にはドーピング問題がつきまといっている。運動能力を高めるために筋肉増強剤・興奮剤・覚醒剤・鎮痛剤などの薬物を使用する不正行為である。1960年ローマ大会の自転車競技選手の死亡事故をきっかけとし、1964年東京オリンピックで定義され、1972年ミュンヘンオリンピックからドーピング検査（尿検査）が行なわれるようになった。スポーツ界には薬物に対する自主規制がある。しかし競技を職業とする選手にとって世界新記録や大会新記録となる成績は栄誉であり経済基盤でもある。勝利＝経済という誘惑に負けてしまう心の問題であることに注目しておこう。

②政界に道義的責任，政治倫理が問われた事件はロッキード事件である。1985年「政治倫理綱領」が作成され，違反した議員の処罰を審査する政治倫理審査会が設置された。『ブリタニカ国際大百科事典』は「全く機能していないのが現状である」と指摘している。ザル法であっても自主規制がある。

③業界には法令遵守（コンプライアンス）がある。市民や地域社会に積極的に貢献すべきだと言う考えである。「公益通報者保護法」は，自動車のリコール隠しや食品の偽装表示など企業の不祥事が内部告発によって相次いで明らかになり，内部告発をした〈公益通報者〉が職場で不利益な取り扱いを受けることを防ぐ目的で2004年制定され，2006年4月施行。業界には企業も社会の一員という位置づけ，消費者保護という社会的責任が求められている。

④インターネット社会の現代は、金融界は国際化し、個人投資家も増加している。ライブドア事件、マネーゲーム、インサイダー取引が新聞を賑やかにした。法的な対応として証券取引法が改正され、2006年金融商品取引法が制定された。

⑤インターネット社会の第二の問題は出会い系サイトである。2003年、出会い系サイト規制法（正式には「インターネット異性紹介事業を利用して児童を誘引する行為の規制等に関する法律」）の施行。迷惑メール（受信側の承諾を得ずに広告や勧誘など営利目的で大量に配信する電子メール、ジャンクメール）は後を断たず規制が追いつかない現状である。

⑥科学技術、医学、医療の分野では、生命倫理バイオ・エシックスは周知の通りである。1960年代、アメリカで患者の人権運動が起り、医療行為は患者の自主的判断にしたがって行なわれるべきであるという考えに由来している。日本では1990年1月、日本医師会生命倫理懇談会が「説明と同意についての報告書」を提示した。

スポーツ界をはじめ企業・業界には名声欲、権勢欲、業績欲などが事件や問題を起こしている。「道義的、人道上、倫理」とは、法による規制と名声欲などの欲望との戦いであり、自浄作用は自滅を避けたいという危機意識であることが理解される。

2. 家庭における家族・地域社会の一員、問題、その対応

家庭や地域社会にはどのような問題があり、どのような対応があるのだろうか。出来事の数量も多く内容も多種多様であって、事例として一々考察できるものではない。次のように分野別にしても多様である。

①夫または妻の不倫や異性問題、ドメスティックヴァイオレンスなど夫婦

間の問題。

②経済的理由で病弱死した母を遺棄した息子。病気の父を息子が暴行・殺害など虐待の問題。2007年度厚生労働省調査によると、家庭内における高齢者虐待件数は13,273件（前年度比6%増）、その被害者77%が女性、40%が80歳代。認知症の症状が認められた人が40%。加害者は息子41%、夫16%、娘15%の順。虐待の種類は、暴行など「身体的虐待」64%、暴言を吐くなどの「心理的虐待」38%、「介護放棄」28%、財産を奪うなど「経済的虐待」26%の順。この調査は高齢者虐待を見つけた人に通報を義務付けた高齢者虐待防止法（06年度施行）に基づくという。

高齢者虐待防止法は家庭には自主規制が働いていないことを示している。

虐待とは言えないまでも、人生相談コーナーに高校・大学の子どもが勉強・生活態度に厳しい親に対する反発・反感を訴えている。

③養育では、給食費を払わない・学費を納入しない親。食育では親が野菜をとらないから子どもが食わず嫌いという調査結果もある。

④IT社会の現代だから起る社会問題の一つに子どものケータイ問題がある。ケータイを持たせることの危険性と子どもが襲われる事件が多発しているので持たせる必要性の賛否両論に止まっている。

⑤地域社会にも問題は多種多様である。近所の騒音、ゴミ回収、隣家との境界問題、テント生活者・路上生活者問題など様々である。慣例、伝統、しきたりが崩壊状態となり、自治に至るまでの自浄作用が乏しい現状である。

⑥言葉使いや服装について筆者の経験を述べてみよう。若者の町、渋谷などに若者が集まれば、数人の友達同士のギャグめいた言葉が、瞬間に新しいコミュニケーションの遊びとして連鎖反応式に広まっていく。例えば「チョー……」、「KY（くうきを読む）」などのように。服装についてル

ーズソックスは『現代社会用語集』に収録され「だらしのない系ファッション」として「大人からみるとだらしのない、しまりのない印象を与える、若者中心のファッションのこと。足首あたりを緩ませてはくルーズソックスの爆発的流行に始まり、ダボダボの上衣、ずり下げたズボンなどが若者に支持されるスタイルとなった」という。

筆者は、ルーズソックスについては、だらしのないが防寒具のアイディアとして理解できた。しかし、シャツの裾については（「シャツの裾を外に出す着方」）若者なら仕方がないと受けとめていた。ところが、ある時、中年女性のそれを見た時の驚きを何と言えよいか。その驚きを妻に話すと「そういうシャツができている」、「今、流行のファッション」の一言であった。「ファッション」であれば周りがとやかく言う必要はないが、受け入れるには抵抗がある。

伝統的固定的観念は「ファッション」の名のもとに追放されたのである。何でも「自由に」、自分が「思うように」を物語る一コマと言えらる。この意識は言葉や服装に留まらず家庭でも地域社会でも慣例、伝統などの約束事を崩壊させてきていた。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」とビートたけしは喝破した。赤信号（慣例、伝統、約束事）を渡れば危険であるが、皆が渡っていることだから、自分一人が責任を取らされるわけでもないから。さらに「寝る前に、ちゃんとしめよう親の首」は、虐待に見るように高齢者社会における家族の問題を言い当てている。

3. 調査に見る生き方の意識

家庭や地域社会における人間関係や目的意識について『データで読む家族問題』（湯沢雅彦著 NHK ブックス 965 日本放送出版協会 2003年）を参

照する。

子どもの生活状況について。記述は引用文を「 」で示し、次にページ数を記す。

①小学生の戦前・戦後の生活状況は……「今の小学生は勉強で忙しいように見えるが、授業時間や課外活動、学校外での学習時間の合計は戦前と変わらない」p34。

今の小学生の生活の特徴として……「家事の機械化・社会化で家事そのものが減ったこともあるが、今は手伝いをほとんどしていない」p34。

日本、韓国、アメリカと比べると……「日本の小学生は手伝いの幅も狭い。ほどほどに勉強を済ませ、手伝いはせず、睡眠時間も削ってテレビを見ている、というのが今の小学生の真の姿だろうか」p34。手伝いが少なければ親子のふれあいも少なくなり、またテレビを見る時間が多いことに要注意である。

1999年の小学校5・6年生の食事状況調査によると、朝食が「子どもだけ」「一人だけ」の子どもは51%、82年調査と比べて12.5%増」p46と言う。

子どもが一人で食べたい理由は「ゲームをしながら食べられるから」や「怒られずにすむから」つまり自由でありたいから。一方親は「友達との会話についていけるように、子ども部屋でテレビを見ながら食べるのも仕方がない」p46。と考え、食べ方などの躰に消極的であり、親子間の距離は食生活でも離れていることが分かる。親を補うものは「友達」であることに要注意。

食事の形態には内食（うちしょく）：食材を購入して家庭で調理した食事。
中食（なかしょく）：持ち帰り弁当、ピザ、惣菜等家庭以外でつくられた出来上がり品を購入して家庭内でする食事。外食の別がある。

「20代の主婦は内食を増やしたい者が多いのに対し、40代以上では中食、次に外食を増やしたい」という p48。1985年の男女雇用機会均等法成立後、女性の社会進出が進み、仕事の帰りに購入して家ですぐ作れるものが必要となっていることが分かる。

食事風景を家庭から飲食業に目を移せば「食べ放題・飲み放題」、「グルメブーム」、それを助長させるテレビ番組、CM 番組が浮かび上がってくる。それはメタボリックなど健康問題から家庭から出される多種多様なゴミ問題に連動している。この背景には冷凍技術・運輸・通信技術の進歩の上に「大量生産・大量消費」、経済至上原理が働いていると言えるだろう。

農業は国内生産から海外生産、漁業は近海から東南アジア・遠洋となり、国内では経済的問題、後継者問題、海外各地には経済的格差社会的格差問題となり、土壌汚染・水質汚染・大気汚染など環境問題となっている。⁽³⁾

産地偽装も起るべくして起る問題であった。消費者にはグルメという欲望、企業には販売利益という欲望という構図であり、欲望の肥大化である。三面記事の事件や出来事は欲望の問題として考察する必要を教えているのである。

現代人は大海原を自由自在に泳ぐ天然魚ではなく、欲望という養殖場でえさを与えられる養殖魚に過ぎない。そのエサさえも、嗜好に応じるようにコンピューター管理されているのである。自粛も自戒も見られないことは確かであり、この意味で地球資源の枯渇、環境問題は本大会のテーマの一項として考察されるべき問題である。⁽⁴⁾

家庭について、あらためて問い直そう。200 年「家庭のもつ役割」に関する世論調査では「お互いに高め合える」、「経済的に安定する」、「精神的安らぎの場」、「家事負担が軽減」などの役割は都市が町村より高く、「子どもを生み育てる」、「子どもに老後を見てもらえる」は低い p74。都市は

家庭の中心は親子より夫婦にあることに要注意。

子どもと親の関係を見てみよう。子育てについて「子育ては楽しい」はアメリカ・韓国は1～2位、日本は5位、日本はアメリカ・韓国の3分の1。「子育ては楽しみや生きがい」について「とてもそう思う」がアメリカ77%，韓国68%に対し、日本は44%と低い。そこで「子育てを積極的に楽しむ人が日本では相対的に少ない」p136。

子育てを楽しめない事情は塾と教育費が考えられる。「子どものダブルスクール化」p140および「子どもの教育費と養育費」p142が物語っている。

子どもは何をしているのか、日米韓の小学生が時間をかけている活動図表p145を参照すると、日本の子どもが時間をかけているものは、テレビを見る（日71%，米96%，韓94⁽⁵⁾%）、友達と遊ぶ（日67%，米80%，韓83%），漫画（日46%，米85%，韓71%）である。時間をかけていないものは、家や図書館で勉強（日9%，米86%，韓55%）、学習塾（日22%，米23%，韓48%）、学校の部活動（日23%，米55%，韓19%）、ボランティア（日1%，米17%，韓2%）である。その結果「活動の幅が狭い」，「日本の子どもの余暇活動は質・量ともに乏しい」と指摘される。また「受験戦争のプレッシャーが子どもの行動を規制していることが考えられる」が「特に日本の子どもが勉強で忙しいために他の活動時間が削られているとはいえない」という子どもの状況が見えないことを告白している。p144。

小中学生の親子の会話を見ると「話題は多様性に乏しく，平均話題数はアメリカの約半分，とりわけ父親との話題が少ない」のであり，「日本の小学生親子の話題は圧倒的に友達や学校のことが多いが，年齢とともに急減し，……代わりに成績や進路の話が急増する」p144。離れていた親子の接点が成績，進路であることに問題はないだろうか。

日本の青少年にとって最も重要な存在は「友人の重要性が際立ち、家族の存在感が相対的に薄い」、「母親とは比較的親密であり、父親とも会話は増えたが、内面的にはまだ父親の不在度は高い」p146と分析されている。1999年頃から「パラサイトシングル」という流行語は先見の明と言えるだろう。p148。

父親とは何か、青年にとって理想の父親像は「家庭生活を特に大切にする」と言い切る割合について、アメリカ・フィリピン45%、タイ41%、フランス・ロシア37%、スウェーデン34%、韓国18%、日本13%である。日本の就業中の若者の5割は仕事に「生活充実」や「生きがい実現」など収入以外のものを求めているが「欧米では、仕事は収入のためと割り切る者が8割弱～9割に達しており、それが理想の父親像に違いを生んでいるのではないだろうか」と推測されている。p150。

日本人の親子間に距離があるが、生活の満足度について「家族が健康」71%で11カ国の中で一番多く、「家庭内で争い事がない」が続き、平穏無事な家庭像が浮かび上がる。しかし注目事項は「親や夫（妻）の愛情」32%、「親や夫（妻）が自分を理解している」27%は、「日本は調査対象者の未婚率が高いため大部分は親からの愛情と理解であろうが、この満足度が11カ国中10～11位と際立って低い」という指摘である。「充実感を感じる」として「家族といるとき」の割合は「7割を超えた国が5カ国もある中で日本はわずか26%、最下位であった」、「日本の青年が充実感を感じるのは「友人」、「スポーツ・趣味」に大きく偏っている」という。p158。

明らかになってきたことは、子供のころから感じていた親子間の距離である。存在感から言えば親子ではなく母子である。その結果、定年退職後の父は家に居場所がなく、地域に出られず、妻の後を追うことになる。

友達が親に代わる存在であり、関心を持つものはテレビであり、そこに自分の好きなこと・興味をもてるものがあるという青年の意識構造である。人間関係は親子ではなく友だち＝同世代という横一列であり、話題はテレビから得る情報である。

『データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版』（石井研士著、新曜社、2007年4月）は、「戦後日本人の意識が大きく変化した」、「私生活を優先する価値観が一貫して顕在化し、『一番大切なのは家族』とする意見が最大級の増加を示した」などの指摘 p1。は前述の分析を裏付けるものである。精神的な支えとなるものについて、「宗教的な心は大切」や「どちらかと言えば先祖を尊ぶ方」という意見が「じりじりと減少し」、「宗教的な心は大切」は「15年間に12ポイント（80%から68%へ）」、「先祖を尊ぶ」も「20年の間に12ポイント減少している（72%から60%へ）」 p2。

この変化をもたらしたものは「家制度」の廃止による求心力の低下であり、裏返せば死後の先祖中心から現世の家族中心へ移ったと推測することができる。高度経済成長政策により物質レベルは目に見えて豊かになった。機械化・オートメ化が進み、人間関係が疎遠になり、覚えたのは疎外感と言えるだろう。生活スタイルは都市型社会と村社会に分かれ、閉鎖的な人間関係やしがらみに縛られる村社会から自由と仕事を求めて希望のある都市社会へ移動することは自然の勢いであろう。このような状況の中で子どもは同年代同世代という友達意識・仲間意識すなわち横一列の気持ちで自分の存在理由となる。仲間はずれや無視されれば存在理由を失い孤立することは目に見えている。社会の一員として見れば、パラサイトシングル、結婚できない格差問題に連鎖していく。

日本佛教学会大会を直前にして秋葉原事件が起った。『アキハバラ発〈00年代〉への問い』（大澤真幸編2008年9月緊急出版、岩波書店）が緊急出

版されると言う。その紹介文は筆者の推測以上の問題の本質を示唆している。

秋葉原でおきた無差別殺傷事件。「犯行そのものはけっして許せないが、犯人の心情には共感する」という、ネットを中心に顕在化した同世代の声をどう受けとめればよいのでしょうか。そこには、若い世代が抱える怒りや孤独、不満、不安、絶望など、私たちが目を逸らすことのできない、いくつもの問題が横たわっています。

昔風にいえば、世も末であり、末法の世である。その原因は家庭の抛り所、家族のアイデンティティの問題ではないだろうか。新聞の投書欄、投書コーナーには身近にある問題について色々な意見が表明されている。食育が注目される昨今では「頂きます」や「合掌」の意味について、お客に「ありがとう」と言われて感じるアルバイトする学生の働き甲斐。よそよそしい地域社会の人間関係について「他人に声をかけて笑顔を引き出したい」。「電柱や街路樹にはチラシを張らないで」は町の景観について、「不登校児には子犬薦めたい」、「独り暮らし宅訪問自治会の人に感謝」、「警官の酒酔い運転あきれて物言えぬ」など。地域社会の伝統行事「雨祈願の竜神」に集う人々の一体感、地元商店の活性化などを教えている。一人ひとり気づいたことの提言や地域社会の動きが自助努力、自浄作用として小さなものであっても、意識変革の始まりの第一歩として重要である。ここから NPO の動きも始まっている。

まとめにかえて

「一番大切なのは家族」と思っても、家族の絆が見えていないのである。家の手伝いといっても建物の構造が変わり、雨戸の開け閉め、雑巾掛け、

庭掃除も不要になっている。

これからの社会で家族の絆になることは、言い換えれば家族の倫理となることは、考察の中で欠如していた「信頼、友情、努力」であろう。この意識は地域社会の一員としても企業・業界にも必須であろう。

第二に友達存在、横一列の考えが強いことが分かった。そこで指摘されていることであるが、地域社会の伝統や慣例の見直し、言い換えれば祭りやイベントによるコミュニケーションの力である。参加することによって色々な人々、色々な考え、年代差、経験差との出会いが、多様化し人間疎外を作り出している現代社会を生きていく力になることは明らかである。そのプロセスで人間と人間、人間と生活環境、自然環境とが生々しく出会うことになる。お互いの出会いが信頼、友情、努力を育むものなら、人権問題も避けて通れないテーマであることを指摘しておきたい。

信頼・友情・努力を仏教用語で提案すれば七仏通誡偈である。「諸悪莫作 修善奉行 自浄其意 是諸仏教」。人間関係で言えば、四摂法（対人関係を円滑にする態度として和顔、愛語、利行、同事）、四無量心（対人関係の心のあり方として慈、悲、喜、捨）である。

共同体でいえば、人間も動物も含めた命の仕組みから言えば、自分は他の全ての命で生かされ、また、他の全てを生かしているという命の共感⁽⁷⁾⁽⁸⁾、意識の共有から開かれる世界観である。仏教が提案する倫理の基盤は信頼・友情・努力であると考え次第である。

註

- (1) 筆者は勤務校で担当する講義に「仏教的生き方」を掲げ、NCC 仏教（ネット・コミュニティ・コースの仏教）の講義などで新聞の投書欄をしばしば資料としている。身近な問題として討議するのに有効だからである。
- (2) 日本仏教の戒律に対する意識について佐藤密雄博士は（『仏典講座 律蔵』

大蔵出版、2003年新装初版、はしがき）に次のように看破している。

「日本佛教ではやや軽視されている傾向がある。……平安朝に、大乘梵網經による大乘戒を主張する伝教大師が、大乘戒壇を設立されて以来、律宗の戒律は小乗であるとされたことが一因である。鎌倉新佛教が大乘戒壇の系統に属し、その流派が現代日本佛教の主流をなしている……戒律の受け取り方についての相違がある。小乗戒は生活行動について、一々具体的に規定して、その正否を示す。大乘戒は行動よりもむしろ行動する精神に重点を置く。……後者は具体的な行為を遠ざかって、形而上学化した戒学を成立し、戒律的行為を軽視する傾向……大乘は思想に誇り小乗は行に沈む誤りに陥っているともいえる。現代社会から佛教人が批判されているのは、思想に誇って行の劣れることにあることも反省されねばならない。……まず律蔵を開き、佛教々団の正しい生活を知るべきであり、その上で、現在のあるべき教団、あるべき佛教人の生活を具体的に考えるべきである。

- (3) 山崎豊子著 『複合汚染』 新潮文庫。
- (4) 『エビと日本人』 岩波新書。さらに『エビと日本人』 II 岩波新書。
- (5) テレビ番組にトーク番組が多い理由として皆と一緒に話しあっている気持ち・友達意識をフォローしていると考えられる。是非は別である。
- (6) 黒川記章氏の共生社会は卓見である。
- (7) 祖霊・あの世と人間・この世の共生として小山典勇 「もう一つの共生社会論」 加藤精一博士古希記念論文集。
- (8) 吉武輝子著 『病みながら老いる時代を生きる』 岩波ブックレット No. 717 2008年。

参考文献

今大会テーマを考える参考文献として

菊池良輔著

『子どもがなぜ親を殺すのか』 民衆社 1989年。

山田昌弘著

『少子社会日本——もうひとつの格差のゆくえ——』 岩波新書 2007年

著者は「パラサイトシングル」1997年（平成9）の造語者。

富永健一著

『日本の近代化と社会変動』 講談社学術文庫 1990年。

上野千鶴子編

『「女縁」を生きた女たち』 岩波現代文庫 2008年発行。「おひとりさまの老後」のライフスタイルの源流がここに。

西垣通著

『ウェブ社会をどう生きるか』 岩波新書 2007年。

色川大吉著

『若者が主役だったころ——わが60年代』 岩波書店 2008年。2000年代の
若者との違いが見えてくる。